

「底が突き抜けた」時代の歩き方 522

生活の中に巨大な地雷を押めて、無限の愛について語ろう・映画『亀も空を飛ぶ』

通信363号「幻の国境から民族の顔が浮かび上がってくる映画 - 『遙かなるクルディスタン』『酔っぱらった馬の時間』(03年4月9日記)を、今読み返している。冒頭は36年ぶりに来日した71歳のジャン＝リュック・ゴダール監督へのインタビュー記事だ。彼が「(作家で映画監督の)マルグリット・デュラスが『映画はとても簡単だ。すべて機械とスタッフがやってくれる。あなたはただ見て、聞いていればいい』と言っていた。でも年を取るにつれ、見ること、聞くことがとても難しいことだということが分かってきたよ」と語ったことについて、通信では《「見ること、聞くこと」の本当の難しさは年を取らなくてはわからず、死が一番押し迫ってきたときにこそ、「見ること、聞くこと」が本当にできるようになるかもしれないと考えながら受けとめると、身に沁みってくる》と説明している。

世界を「見る」ために、「聞く」ために私たちはこの地上に生まれてきたが、社会の中で年を経るにつれてしだいに「見ること、聞くこと」をしなくなっていった。社会の中で大人になるためには、「見ること、聞くこと」をしなくなるほうが好都合であったからだ。しかし、死が押し迫ってきて本当に「見ること、聞くこと」が出来なくなる恐怖に直面するとき、私たちは生まれてきたときに最初に見た光景や、聞いた声や音を遠く想い起こしながら、あまりにも長い間「見ること、聞くこと」を忘れてきたことを痛感し、人生の最期の「見ること、聞くこと」に自分の生涯のすべてを委ねようとするかもしれない。

また、「米映画の世界支配はミステリーだ。米国にはもはや本物のプロデューサーはいない。いるのはエージェントと弁護士だけだ。彼らは夢を工場でつくることに成功したが、夢は本来、工場でつくるべきものではないという批判がある」という、ゴダール発言も採録されているが、工場でつくることのできない夢を、すっかり焦土と化した廃墟からどのように生み、育てていくのかが、映画『亀も空を飛ぶ』の主題となっていることをここで強調しておかなくてはならない。この映画製作では映画はビジネスではないのだ。ビジネスになるほど映画産業として発達していないのだが、戦争に振りまわされている子供たちに一筋の光明を与え、励ますのに映画づくりほどふさわしい文化活動はないことを立証している点で、映画『亀も空を飛ぶ』はビジネスではなく、出演者の子供たちを含む映画関係者の夢だけで成り立っているのである。

バフマン・ゴバディ監督は第一作『酔っぱらった馬の時間』で、00年カンヌ映画祭カメラドール新人監督賞と国際批評家連盟賞をダブル受賞しているが、この第一作については通信のなかで次のように言及している。

《題名は、出発前にラバにウイスキーを飲ませ、酔った勢いで一気に雪山に登らせるといふ光景に因んでいるが、ラバですら素面でいられない世界を生きるクルドの子供たちがバザールから村に帰るトラックの荷台で、「人生は苦勞ばかり、子どもですら老いてゆく／つらい仕事がぼくらを死にみちびく」と歌うシーンがある。感傷でもなんでもなく、馴染んだ歌をこともなげに大声で歌っているのだ。カメラもまた、なんの感傷も交えずにありのままをまるでドキュメントのように映しだしていく。現実がいかに過酷でグロテスクであろうとも、その中で生まれ育ってきた子どもたちは、大人たちが生きてきたようにして自分たちも生きていこうとする。別の人生などもともとないことが初めからわかっているとでもいうように。ただ酔っぱらったラバを引く大人たちも充分酔っぱらっているのに、子どもたちは大人になって酔っぱらうまで素面の辛さをあふれるほど自分の中に溜め込んでいくのだろう。

この国日本にはなんでもあるが希望だけはないといった作家に倣って、ここにはなんにもない（ようにみえる）が愛だけはあるといいたいくなるほど、人間の生は愛をくぐり抜けて死へと向かう、という人生のシンプルな原型をも思い起こさせてくれる。難病で死に晒されている兄のマディが愛を一身にまとわなければ一瞬も生きていくことのできない存在であるなら、姉や弟妹はそのマディの難病を自分たちも背負うのが当然であるかのようにして、彼を中心に日々の暮らしを支えていく。そのことを端的にあらわしているのが何度も繰り返される彼へのキスである。》

コラムニストの中野翠による秀逸な形容に従えば、《きょうだいたちは、この「守り神」のようなお兄ちゃんにさかんにキスをする。貧乏で何もしてあげられないけれど、キスだけはしてあげられる》ということだが、イラクとの国境に近いイラン領クルディスタンの小さな村に住み、イラクとの密輸の仕事で生計を立てていた父親が密輸品を運ぶ途中に地雷を踏んで命を落とした後、12歳の次男が兄の手術代と一家の生活費を稼ぐために中心になって、父親の仕事を引き継ぐストーリーの『酔っぱらった馬の時間』（00年）から、二作目の『わが故郷の歌』（02年）を経て、03年のイラク戦争突入後の04年1月に撮影を終了した三作目の『亀も空を飛ぶ』は、『酔っぱらった馬の時間』の主人公の一家でさえまだマシであったと思われるほど、戦争によって家族はバラバラになり、その上ストリートチルドレンのような子供たちの多くが地雷で片足や両腕を失っているという、苛酷で悲惨な境遇が舞台になっている。

『ニューズウィーク』（05.9.14）のインタビューで、「映画のタイトルは、私たちを苦しみから解放するのが死だけだということを示唆している。あなたもそう思うのか」と訊かれたゴバディ監督は、「実際にイラクに行った者は誰でもそう思うよ。私自身も人生で何度か自殺を考えた。こんな苦しい人生はいらないと思った。／現世より死後のほうが、いい世界だと思う」と答えている。こんな答えかたをしているのは、私の目に触れるかぎり、この誌面だけである。『キネマ旬報』（05年9月下旬号）の取材（杉原賢彦）では、《クルディスタンの空の美しさ》について、「残念ながら空にも国境線が

引かれてしまっています。空すらも人々から奪われてしまっているのです。……けれど、クルドでは、手を伸ばせば星が取れる空というような詩があるのです - 、『幼い頃、屋根裏に寝ころんでお父さんに訊いた／星がすごく近いから取ってもいい？／そしたらお父さんは、そんなことを言うと神さまが怒るよ、星は神さまのものだからって言った／ある晩、お父さんに訊いた／どこの世界もこんな空なの？／そしたらお父さんは、そんなことを言うと神さまが怒るよ、どこの世界も同じように創られているのだからって言った／大きくなって国を出なければならなくなった／ロシアのモスクワに行った。モスクワの屋根裏に上って空を見たら、星がひとつもなかった／故郷の村に戻ってきて同じ空を見た。そしたら星がすごく近かった……』と暗誦してみせた後、『自分の映画はインディペンデントの低予算映画だが、いっぱい色彩やきれいなものを見せてあげたい』と語っていたのに。

通常はインタビューなどで、たとえそう思っていたとしても、「現世より死後のほうが、いい世界だと思う」、それほど自分たちクルド人の人生は苦しいなどと公言したりはしないものである。人生は苦しいが、映画を撮る喜びに自分の人生は支えられている、などという述懐になってしまうのが、よく目にするインタビュー記事であった筈である。ここでの監督発言は、そう思いながら映画を撮っているということだ。もし映画を撮っていなかったら、自分は自殺していたかもしれない、そう言っているように聞こえる。では映画があったから、生き延びられるのか。そうすると、“人生は苦しいが、映画を撮る喜びに自分の人生は支えられている、”というありきたりな述懐になるのではないか。いや、そうとも思われない。確かに映画を撮るのは喜びだが、それは同時に、目の前の無惨な現実に対して、どうすることもできない底なしの無力感に襲われつづけることでもあるだろう。

自分は一体、なんのために映画を撮っているのか、をバフマン・コバディは必死に、切実に問うていたのだ。映画を撮ることが喜びだから、映画を撮っているのではない。おそらく彼にとって映画を撮る喜びは、映画を撮る苦しみでもあったにちがいない。だいいち、クルド人である彼には他の国々や地域のように、映画を撮ることは自明な行為ではありえなかった。映画を撮ることなどよりも、一日一日を生き抜くために米塩の資を稼ぐことが最優先される余裕のなさであった筈だ。だからこそ逆に、彼は映画を、クルド人の映画を撮らねばならないと思っていたし、そんな内心の火を燃え盛らせてきたのではなかったのか。なんのために映画を撮るのかを問いながら、映画を撮りつづけること自体が彼にとっては生きるためのたたかいにほかならなかったといえよう。

映画『亀も空を飛ぶ』にもっと踏み入るために、映画からは見えてこないシーンや、聞こえてこない会話について監督の言葉により注意深く耳を傾けようと思う。川本三郎を聞き手とするインタビュー（『世界』05・10）では、まず初めに出演した子供たちとの出会いについてこう語る。

「イラク戦争が終結したあと、2003年5月にイラクに入り、クルド人が暮すキャンプを訪れた時、障害者になった子供が多いことに打ちのめされました。

脚がなかったり、腕がなかったりする。地雷のためです。親もいない孤児です。それでも彼らは、われわれが考えるよりもはるかにたくましく、生きようとしていました。その姿を見て、彼らの映画を作ろうと思いました。作らなければいけないと。」

「子供たちは、はじめ私たちを怖がっていました。映画を作る人間はカメラをはじめ、たくさん機材を持っているでしょう、それが怖かったんだと思います。もちろん、それまで映画を見たこともなかった子供たちです。」

だからまず、子供たちと親しくなることから始めました。一緒に生活をする。一緒に食事をしたり、お喋りをしたりする。私自身、クルド人ですから、そうしているうちに子供たちも次第にうちとけてくれるようになりました。」

「脚本の段階では、中心になる男の子を描くという程度しか考えていませんでした。あとはすべて現場に行き、子供たちと一緒に生活しながら、彼らの話を聞いて、物語を作ってゆきました。」

「子供たちの心を傷つけない。そのことにいちばん気を使いました。レイプされる少女を演じた女の子は、レイプの体験はありません。撮影の5分前に、きみはこれからイラク兵に殺されそうになると説明しました。彼女がおびえないよう、イラク兵を演じているのは実は、私と3人の助監督なんです。」

「少年が水の中に潜る場面があるでしょう。そんな時、撮影する側が、自分たちだけ楽しんで、水に入らずにいたら駄目なんです。私もスタッフも、まず水に入る。そうしているうちに信頼が生まれてきました。」

主人公を演じた少年は、この場面はこうしたほうがいいとアドバイスまでしてくれるようになりました。みんな『明日（の撮影）が楽しみだ』って。うれしかったですね。」

「大人には子供を助ける余裕がないんです。自分たちも毎日、必死で生きている。だから子供たちは、自分の力で生きなければならない。彼らは、その意味では、大人なんです。」

「ええ、だから実際の子供たちも明るいです。長いこと苦しめられてきたクルド人は、生き残るために「ユーモア」と「音楽」を大事にしますが、子供たちも自然とそのふたつの生きる知恵を持っています。」

「子供時代が失なわれてしまっているということは、確かに不幸なことではあるんですが、小さい頃から厳しい現実のなかで生きてゆかなければならないから、子供たちはたくましいんです。そのことがわたしの希望になっています。」

「製作費は、約40万ユーロ（日本円で約5000万円）ほどです。いつものように、自分で集め、借金をしました（笑）。

わたしたちの映画作りは、製作資金を集めるということが、映画を作ることに大変なんです。わたしの仕事も、脚本や監督だけに専念出来たらいいのですが、その他に、やらなくてはならないことがたくさんあります。一人8役くらいです。」

具体的な映画づくりへとインタビューが進むので、以下、聞き手も登場させよう。

川本 専門の俳優は一人も出ていない、いわばエキストラによって作られているわけ

ですが、彼らへのギャラはどうされたんですか。

B・G 予算がありませんから、ジュースとお弁当だけです（笑）。

川本 アメリカによるイラク侵攻、つまり戦争が迫ってくる。それで難民キャンプにいるクルド人が丘の上に避難する場面がありますね。大勢の人間が - 老いも若きも、男性も女性も、丘の上に上がる。それをカメラは俯瞰でとらえる。この映画のひとつのクライマックスですね。あれだけのエキストラを登場させるのは大変だったでしょう。

B・G あの場面は、8000人の人に参加してもらいました。映画としてインパクトを与えるために、どうしてもそれだけの人数が必要でした。

それで、クルド人のキャンプや村をまわって、「どうか出て欲しい」と頼みました。手足にキスをして。みんな、わかって喜んで出てくれました。なぜなら「クルド人が作る映画」だから。うれしかったですね。

川本 イランに住むクルド人の監督の映画のために、イラクに住むクルド人たちが協力をする。国境を越えていますね。

B・G クルド人は国を持たない民族ですから、さまざまな国で差別を受けています。だから戦争の被害を受け続けていました。

クルド人にとっては、戦争はもう生活の一部になっています。だから、戦争で苦しむクルド人を描くわたしの映画にすすんで協力してくれたのだと思います。

川本 アメリカに対して批判的な映画でよくアメリカ軍のヘリコプターを貸してもらえましたね。

B・G どう交渉したか、それは秘密です（笑）。地雷を売るサテライト少年のようにわたしも、たくましくなりました。

「先ほどいいましたように演じている女の子は、レイプされていないんですが、映画のなかの役をよく理解してくれました。頭がいい子供なんです。

考えてみれば、いや、考えてみて下さい。われわれクルド人は、イラン、イラク、トルコ、シリアの4ヵ国にまたがって暮しているのですが、それはちょうど、色々な国にレイプされ続けてきたようなものなのです。

彼女は、いわばクルド人が置かれている困難な状況をあらわしています。」

「インタビューでは必ず題名の意味を聞かれます。それだけ抽象的でわかりにくいということでしょうが、逆に、それだけ印象的であるわけで、これでよかったと思っています。

両腕のない子供が水の中に潜る場面がありますが、その姿は、亀が空を飛ぶように見えるでしょう。

レイプされた女の子は、いつも小さな子供を背負っています。その姿が、甲羅を持った亀にも見える。

困難な状況にいる子供たちでも「空を飛ぶ」夢を見ることが出来る。そんな、絶望のなかの希望をあらわしています。」

映画に出演した子供たちの近況については、「ご安心下さい（笑）。みんな幸せに暮し

ています。脚のない子供と、目の見えない子供と、それに、少女には、家を買いました。少女には、クルディスタンのテレビ局の仕事を紹介しました。元気で働いています。

両腕のない子供には、義手を作る予定です。『酔っぱらった馬の時間』に出演した少年とこの映画の少女が、結婚したらいいな、というのが、もっかのわたしの夢です」と話しており、映画パンフ収録の記者会見によれば、主人公の「サテライトは監督になると言っています。才能があるので、ちゃんと勉強したら手伝ってあげるよ、と約束してきました。『酔っぱらった馬の時間』のアヨブは映画を撮る予定なので、私は自分の映画を撮り終えたら手伝います。そのときにはサテライトにまず助監督として働いてもらおうと思っています」ということらしい。

先の『ニューズウィーク』では、その後の「彼らの人生は変わった。目の見えない子は手術を受けて、見えるようになった。両腕のない少年と片足の少年は学校に入り、「出演者たちも完成した作品を見に来たよ。手術で目が治った子も来て、目が見えなかったときの自分をスクリーンで見ている。子供たちは私に何度もキスしてくれた。人生で最高のキスだった」と喜びを語っている。対談の最後に川本三郎が、「東京のように豊かで平和な町に来たら、クルディスタンの現状と、あまりに落差が大きくて驚きませんか」と聞くと、ゴバディ監督は、「そんなことはありません。クルディスタンの子供たちは、明るく、たくましく、そして幸福です」と笑って答えたところがあるが、「明るく、たくましく」はともかく、「幸福です」と付け加えていることの意味について、日本人である我々は真剣に考えなくてはならないだろう。聞き手は無邪気に「クルディスタンの現状」と比較して、戦火のない東京のほうがはるかに人々は幸福である筈だという先入観をもっていただろうからだ。

パンフ収録の記者会見でも監督は、「実は、私はこの映画を撮る前に、とても絶望的な気持ちになっていました。これからどうすればいいのか、なぜ映画を作るのか、と希望を失っていた時期でした。その後、イラクで手や足を失った男の子たちと一緒に映画を撮っていて、彼らからエネルギーとか、人生へのあふれるような熱情をもらいました。彼らには今でも感謝しています。彼らは苦しい生活を送っているのに、毎日よく笑い、すごく生き生きとしています。たぶんその微笑みは世界で一番美しいものでしょう。世界の各地へ行っていますが、このような子どもたちには会ったことがありません。彼らは悲惨な状況の中にいるので、希望の無い生活をおくっていると思われがちです。しかし実は子どもたちはすごく強く、一日をとっても大切に楽しく過ごし、素晴らしい魂を持っています。精神的にもとても健康で、身体も丈夫です」と語っており、映画づくりを通じて接触する子供たちの向日性のような野性的強さについて語ることで、彼の見た日本や、日本の子供たちのエネルギーのなさや無表情について暗に言及していたにちがいない。

日本の東京が「豊かで平和な町」だって？ 一体どこが？ 確かに車も多いし、モノはあふれ返っているね、だがそれだけ……、少なくとも子供たちの明るさやたくましさでは、とても「豊かで平和な町」とはいえそうにない、一体、人々も子供もこれでどう

して「幸福」といえるんだい、といった発言がいきなり飛び出してきてもおかしくはない監督発言とみなせる。どこの国の子供であろうと、目がすぐに子供に行ってしまう監督が来日しているのに、一言も日本の子供たちに言及することなく、いかに映画に多くの子供たちが出演していたとはいえ、我がクルディスタンの子供たちの「素晴らしい魂」についてのみ強調することは、日本の子供たちに欠けているものの大きさのなかではますます彼らの「素晴らしい魂」は光り輝いてみえるということだろう。この記者会見で監督はもう一個所、日本に言及している。

「イラクで今一番みんなが切望していることは文化的な活動、文化センターのような場所です。映画館とか、劇場とか、とにかく映画祭や音楽祭などを切望しています。(…)自衛隊はずっとイラクにいても、一つも文化的な活躍はみられません。逆に、私が見たところでは、韓国の軍隊(現在クルディスタン自治区に派兵中)兵士たちは歩きながらものを直していく、歩きながら学校を作っていく。一カ所に留まらず、文化的なことも考えて文化祭などもしてくれます。それでクルド人の中では韓国人はとても親しい人たちになりました。残念ながらそういう動きは、イラクにいる日本の自衛隊にはみられません。私の声はどこまで届くかわかりませんが、私はこの場を通して日本の方にぜひお願いをしたい。予算があればみんなが切望している文化的活躍に使っていただきたいと思います。教育の場とか、映画館とか、楽しいことや文化的な催しを行う場所が今はとても少ないので、そういう所で日本の名前を見たいと思っています。」

日本がもし経済大国で「豊かで平和」な国であると思っているのであれば、その豊かな富のごくわずかでもクルド人のための「文化的活躍に使っていただきたい」、日本の自衛隊は真の意味でのイラクの人道復興支援活動に取り組んでほしい、と皮肉を通り越して絶望しているのだ。監督のインタビュー発言や記者会見の中で、おやっと思ったところがある。それは、『酔っぱらった馬の時間』に出演した少年とこの映画の少女が、結婚したらいいな、というのが、もっかのわたしの夢です」と語っているところだ。「わたしの夢」とは些か大仰に感じられるが、彼がそう言ってみせるのを理解するには、彼がその少し前に、「われわれクルド人は、イラン、イラク、トルコ、シリアの4カ国にまたがって暮しているのですが、それはちょうど、色々な国にレイプされ続けてきたようなものなのです」と語っていることに、もちろん、かかわっているだろう。

映画パンフの中で山内昌之も記述しているが、中東全体に広がるクルド人の人口は推定二千万から三千万であり、トルコ人、アラブ人、イラン人に次ぐ中東第4の民族でありながら、《三つの強大な民族のつくった国々の間に分散して住》むことを余儀なくされてきた。民族国家を持たない、いや持つことを周辺諸国から許されていないクルド人は、トルコでは《「山地トルコ人」として扱われ、ながいことクルド語の使用さえ禁じられてきた。こうしたトルコのクルド人は、1000万を超えており、トルコ国民の20パーセントを占めるとさえいわれる。》イランではクルド人はおよそ600万近くで、他の少数民族を合わせると、ペルシア語を話すシーア派のイラン人と同数になる。第二

次大戦後に「クルド人民共和国」を企てたが、援助していたソ連のスターリンの裏切りによって11ヵ月の短命に終わった。《イランのクルド人の悲劇は、1980年から88年まで続いたイラン＝イラク戦争のなかで、隣接する同胞との対決を強いられることで倍加した。イランのイスラーム革命でなく、クルドの独立にこだわる敵の「第五列」と見なされただけに、かれらの立場は相当につらいものがあつたにちがいない。》

アラブ諸国のシリアとイラクのクルド人は450万以上を占めるが、《イラクのクルド人は、モスルやキルクークといった世界有数の石油産出地に住んでいただけにサダム・フセインの徹底した弾圧にさらされてきた。とくにイラン＝イラク戦争が始まると、イランと協力した廉でクルド人は同じスンナ派のイラク国民でありながら、スンナ派アラブ人を主力とする軍が使用した毒ガスなど化学兵器によって悲惨な「クルド人のヒロシマ・ナガサキ」を経験することになった。これが1988年3月に起きたハラブジャ事件である。一説には、5000人の生命が失われ、声帯や皮膚に障害の出る人数未詳の犠牲者を生んだ。これこそ、バフマン・ゴバディ監督の「わが故郷の歌」(2002年)のラストシーンにつながる事件であり、最新作「亀も空を飛ぶ」(2004年)の準主演の少女を襲った悲劇の背景ともなっているのだ。》

今回のイラク戦争を機に成立した《新たなイラク国家は、大統領にクルド人のタラバーニ(クルディスタン愛国同盟)が就任し、自治区首相にネチルバン・バルザーニ(クルディスタン民主党)が選ばれ》するという、これまでのクルド人にとっては信じがたいほどの好ましい進展をみせたが、以上のあまりも大雑把な記述ではあっても、そこに浮かび上がってくる背景のなかに第一作の少年と第三作の少女の結婚を置くと、ゴバディ監督がその結婚にどのような「夢」を託そうとしているのか、気づかないほうがどうかしている。そう、『酔っぱらった馬の時間』はイランのクルド人の少年で、『亀も空を飛ぶ』はイラクのクルド人の少女であるから、彼らの結婚は同じ民族でありながら4つの国に引き裂かれている、その分断状態を突破する「夢」を宿していることになるのだ。監督志望の『亀も空を飛ぶ』の主演少年に、『酔っぱらった馬の時間』の少年が撮る予定の映画に「まず助監督として働いてもらおうと思ってい」るのも、同じ「夢」にむかって前進しようとする試みといってよい。

記者会見の監督発言によれば、次の映画は「トルコの街に住むクルド人の家族の話」だそうで、彼にとっての映画づくりはクルド人の手で作られるクルド民族の映画として、民族を引き裂く国境を跨ぎ、一つのクルディスタンとして結集するための触媒の役割を積極的に担う意志をあらわしているのだ。映画批評家の四方田犬彦は『世界』(01・6)で映画『シュリ』や『JSA』について、「民主化世代として若い映画人が、いままでの歴史的な禁忌というものに踏み込んでいけるという自信をもって、しかし韓国映画が南北問題を扱わなかったらこの先どこに進めるんだという自覚、志を持って映画を撮るようになった。ベルリンが『どうして自分たちはこういう映画を撮れなかったのか』というのは日本についても言えます。日本映画のいま30代、40代の監督や製作者たちは、

天皇についてこういう映画をなぜ撮れないのか」と語っていたのが、ここで思い返される。

この彼の発言を載せている通信363号では続けて、映画『JSA』が公開されると、人間的な南北兵士の交流の描写に多くの共感が寄せられるなかで、「北の兵士を兄貴と呼ぶなどありえないことだ」「戦友たちの名誉を棄損した」として、非武装地帯の元軍人たちが製作会社へ抗議に押しかけた事件に触れて、「それらを含めてこのフィルムが撮られたというのは韓国では一つの事件なんですね。韓国映画史の事件であると同時に、映画が歴史をつくるという20世紀の歴史の中で、これが南北関係に対するある共通了解というものを一歩進めたということが言えると思う」と、四方田犬彦が評価していることも取り上げている。

「日本には日本人という民族の顔が見えるような作品は存在しない。かつて、仏、独、露、伊にはそういう意味で『映画』が存在した。しかし、その他の国では優秀な映画作家は生み出したものの、『映画』は生まれなかった。日本も同じように優秀な作家が何人かいるが、『日本映画』というものは存在していない」というゴダール発言との関連で、「韓国映画が南北問題を扱わなかったらこの先どこに進めるんだという自覚、志を持って映画を撮るようになった」という彼の評価を、もちろん捉える必要があるだろう。ゴダールはまた、「映画とは、ある国民が自分自身の姿を見極めようとするやり方だと思う」と述べ、「国民全体の顔が分かるような映画が現代には存在しない。映画は難しい時期に来ていると思う」と吐露している。通信では、「『映画とは、ある国民が自分自身の姿を見極めようとするやり方だ思う。』ということは、国民のアイデンティティーに関わる問題に映画は取り組むべきだということであり、「国民全体の顔が分かるような映画が現代には存在しな」くなったということは、国民のアイデンティティーが現代では見えなくなってしまったということにほかならない。ゴダール監督のこれらの発言を念頭に置きながら、一ヵ月程前に連続してみた二本のクルド問題を描いた映画、『遙かなるクルディスタン』と『酔っぱらった馬の時間』について考えている」と読み取っている。

四方田犬彦に倣って「クルド映画がクルディスタン問題を扱わなかったらこの先どこに進めるんだ」と強調しなければならないし、ゴダールが言うように、「映画とは、ある国民が自分自身の姿を見極めようとするやり方」であるなら、ゴバディ監督が映画を通じて自分たちクルド民族の姿を見極め、4つの国に分断されているクルド人が結集すべき方向を指し示しながら、その一歩を力強く踏み出しているのがはっきりと伝わってくる。彼は記者会見で、クルド人といえば、「戦争」とか「苦しんでいる」という言葉がすぐに浮かんでくるが、「望みとか希望をたくさん持っている民族だということ」を付け加えたいと語り、クルド人が自らの手でやらなくてはならない課題の多さを、「望みとか希望」の多さと捉えることで、映画に可能なかぎりの役目や使命を負わせようとする。

さて、『亀も空を飛ぶ』では、『酔っぱらった馬の時間』で主人公の一家の父親がイラクに密輸品を運搬している途中に地雷を踏んで命を落とし、そんな危険な仕事を主人公が生活のために引き継ぐというように、物語の全体に危険で重苦しい影を落としていた

「地雷」が、子供たちの除去仕事としてや、地雷に触れたことが原因で脚、腕を失くしたと思われる子供たちが群れている有様として、また、目の見えない幼児が地雷原に迷い込んでしまったために命懸けで主人公の少年が救出しようとする場面として、大きく前面に迫り出てきている。大人も子供もクルドの現実の生活が、村の周辺に埋め込まれた「地雷」の上に成り立っているのが象徴的に描写されている。

現在、全世界に埋設された地雷の数は約1億5千万個（うちイラクに1千万個）と言われ、毎年3千人弱（うち30%が14歳以下の子供）がその犠牲になっている。しかも今も50ヵ国で年間百万個以上の地雷が生産され、35ヵ国が輸出しているという。

1個約3ドルという安価で単純な仕組みの兵器のため、各国とも町工場のようなところで生産されており、生産額、輸出額の統計はない。この無差別かつ残忍な兵器の禁輸に対する世界的コンセンサスは出来ていないが、その代わり各国のNPOが真剣に地雷除去作業に取り組んでいる。しかし、危険なうえに、一個3ドルの地雷を除去するのに最低300ドルのコストがかかるという問題が大きく横たわっている。映画の少年たちも手や足を失う危険を冒しながら、わずか1個20～30ディナール（0.5円前後）で引き取られているのが現状である。

ゴバディ監督も当然、記者会見で「地雷」についてこう言及している。

「地雷に関しては、子どもたちは地雷を見つけると一個5ドルくらいで売っています。壊れた戦車なども集めてきて、それが他の国にわたり、さらにイギリス、フランス、イタリア、ドイツ、アメリカなどの国に送られます。それで再び地雷が作られまして、また同じ地域に埋められます。ですから、子どもたちや普通の人々の手を使って、地雷は一度は片付くのですが、その地雷はまた同じ子どもたちの足下に埋められるのです。

いろいろなグループが地雷を除去すると言ってイラクに来ますが、彼らの給料は一日だいたい1000ドルくらい、地雷を探し出す犬の費用は一日に200ドルと聞きました。さらに、子どもたちが集めた地雷を仲買人から買い取り、自分たちの組織の貢献を増やそうとする人々もいるのです。」

『亀も空を飛ぶ』では、イラクの兵士にレイプされた少女が自分の盲目の子供を捨てるが、その子供が地雷原に迷い込んだため、主人公の少年たちが駆けつけて救出しようとする。その際に主人公の少年は地雷に触れて足を負傷するが、この映画のなかでも最も息詰まる緊迫したシーンであり、しかし、次の場面では少年が折角命懸けで救出した子供が、母親である少女に池の中に投げ込まれて水死し、少女もまた切り立った崖の上から身投げするという、なんともやりきれない惨事が繰りひろげられる。映画で描写されるクルド人の子供たちにはどこまでも救いのない絶望的な状況が打ち続くが、子供たちが生き延びるために掘り起こした地雷が“リサイクル”されて、別の地雷に再生され、また同じ地域に埋められるという、悪夢の果てしない循環のなかで子供たちが逃れがたく生きていることを知るなら、映画はクルドの子供たちの現実の生活を誇張なく、ありのままの姿で等身大に切り取っているのがみえてくる。

確かに映画のなかに救いはない。というより、救いがどこかに見出されるようには映画はつくられていない。監督からすれば、映画のなかだけで見出されるような救いとは無縁のところでは子供たちは生きているし、だいいち、映画のなかだけで救われたって、どうにもならないじゃないかということだろう。しかし、映画に救いはなくても、映画は暗くはない。それは、映画に登場する子供たちに不運の意識はあっても、不幸の意識はないだろうからだ。手足がもぎ取られることがあっても、子供たちの頭をつねに占めているのは今を生き抜くことだけであるのが強烈に伝わってくるから、観客にも打ち続く惨劇の暗さは尾を引かない。子供たちのたくましさは希望であると語る監督の意図が、数多くの不幸に取り囲まれるなかでの子供たちの生き抜く輝きの描写にあったとするなら、リーダーである主人公の少年の元に子供たちがクモの子を散らすように、土煙を立てて群がる様の圧倒的な迫力が画面一杯に漲^{みなぎ}っているのが我々観客に感じ取れるだけで、描写は成功していたといえるだろう。

不幸が大きければ、希望も大きい。少なくとも不幸の大きさは希望を浸食しているようにはみえないことが、この映画が描く絶望のその先に我々観客を立たせようとしていることは間違いない。監督が川本三郎に、「子供たちが命がけで掘り出した地雷がめぐりめぐって同じ子供たちの足の下に埋められる。そういう想像を絶する事態を世界の人にぜひ知ってもらいたい」と語るとき、当然「そういう想像を絶する事実」のうえにあなたの思考や行動をもう一度根本から組み立て直してほしい、つまり、あなたの生き方を根底から変えないかぎり、「そういう想像を絶する事実」を受けとめて生きることにはできないのではないか、という声が裏面から響いているのを聞き取らなければ、悲惨な事実はいつも我々の生活の視野から遠ざけられてしまうだろう。

地雷の上で暮している子供たちの生活について、映像からその事実を知っただけでは済まされないものを感じるとき、確かに我々も子供たちが直面している地雷とは異なるなにか別の「地雷」に直面しなければならないような気がする。子供たちの足下に埋められている同じ地雷ではなくとも、我々も触れたらこれまでの自分が木っ端微塵に吹っ飛んでしまうような「地雷」を自分の足下に埋め込んで生きなければ、子供たちの「想像を絶する事実」を受けとめられないだろう。地雷の上の生活を知るには、自分もまた「地雷」の上に横たわる日々を送らねばならぬ。子供たちが命がけで掘り出す地雷は、もし一直線にそのまま向かってくるなら、我々に命がけで自分の足下に埋め込むような「地雷」を懐中深く持っているかどうかを問いかけていた筈である。自分一個の存在を跡形もなく吹き飛ばしてしまうような強烈な「地雷」を自分の中に飼育しながら生きてきたのかを突き迫っていた筈だ。映像の中の子供たちの地雷をスクリーンを通して受けとめるためには、こちら側に「地雷」が用意されていなければならない。子供たちの地雷を吹き飛ばしてしまうほどの威力のある「地雷」を一発、自分の人生で作りだせるかどうかにかかっているという妄想が、画面の子供たちのようにゆらゆらと群がってくる。

2006年1月14日記